



「養老町少年の主張」において、中学校で最優秀賞に選ばれた細川士禾さんの作品は、西濃大会で最優秀賞、県大会で県知事賞を受賞しました。今回のシリーズ人権では、細川さんの作品を通して、差別のない社会について一緒に考えてみましょう。



## 認め合うことの大切さ

高田中学校三年 細川 士禾

みなさん、もしあなたが、片腕のない人を見かけたら、どうしますか。声をかけますか。それとも、かけませんか。

もし、あなたがお子さんと一緒にいるときならどうですか。

「見ちゃだめだよ。」そんな声をかけますか。

僕の妹には、生まれつき片腕がありません。そのことで、妹はたくさん辛い思いをしてきました。

「あの子、手がないよ。」

今年の春、妹がある女の子から言われた一言です。妹は、どうしていいかわからないと、戸惑いと悲しみの表情を浮かべ、僕たち家族の前でわんわんと泣いていました。その姿は、今でも僕の目に焼き付いています。それを見た母も、本当に苦しうでした。まるで何もしてあげられない自分を責めるかのように、ただ泣いていました。そのときのことを思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ただ、みなさんに知ってほし

いことは、妹は、このような経験を何度もしてきたということです。

そうした中、僕は自然と考えるようになっていました。もし、自分が逆の立場だったらどうするのだろうか。妹と同じように、片腕がない人がいたら、足がない人がいたら…。僕はどうするのだろうか。きつと、「見てしまつと思ひます。なぜでしょう。答えは簡単です。『自分と違うから』です。時に、『違う』ことは、問題を引き起こす要因にもなり得ます。しかし、『違う』と認識すること、これは、差別なのでしょうか。そもそも今年の春、妹の手がないと言った女の子。彼女に、相手を苦しめようという意志はあったのでしょうか。きつと答えは、『NO』です。

僕は思います。僕たちはいつからか、『差別をしないこと』『何もしていないこと』、ひいては、『目を背けること』だと、大きな勘違いをしているのではないかと。冒頭で話した、『見ちゃダメだよ』という発言も、このような勘違いから生まれた言葉じゃないでしょうか。違いを認識し、見て見ぬふりをする、そして、何もしようとしないうちに、これこそが、大きな問題だと、ぼくは思っています。なぜなら、僕たち人間は、違いを知るからこそ、その先のことを考えることができるはずだからです。

それから僕は、妹にかける言葉が変わりました。

「見られるのは当たり前だよ。だってさ、自分と違うんだから。」

聞いた妹は、少しきょとんとして、僕の顔を見つめていました。

僕も妹も母も、辛い経験を多くしてきましたが、考え方一つで、こんなに大きく傷つくことはなかったのかもしれない。相手は違いを認識しただけ。その先が何よりも大事です。僕たちも、もしかしたら、スターラインに立っていないかったのかもしれません。

妹のおかげで、僕は大切なことに気付けたような気がします。差別とは、考えることをやめ、相手から目を背けることなのです。ですから、『見ちゃだめだよ。』に代表されるような言葉は、一見相手を思いやっているようにも見えますが、考える機会をただ奪うことにもつながりかねない、上辺だけの言葉なのです。ですから、僕たちは、まず、その人らしさを認め、違いを受け入れ、その上で、その人にとってどんな行動や考え方が必要なのかを考え、見つけ出していくことが、何よりも大切なのです。

妹がいてくれたからこそ、僕は目を背けず、考えることができました。

妹がいてくれたからこそ、僕は相手の気持ちを考え、行動することができま



9月2日(木) 表敬訪問にて



した。今の僕があるのは、まぎれもなく妹のおかげです。本当にありがとう。僕はこれからも、妹が、そして、全ての人が、心から笑っていられるように、目を背けず考え続けます。その先に、差別のない社会があると信じて。

## 細川さんの主張から感じたこと

いかがでしたか。

「何もしていない」なんて考えていない。だとするならば、問題から目を逸らしていることになります。マザーテレサの『愛情』の反対は『憎しみ』ではなく、『無関心』という言葉が、浮かびました。

相手に寄り添い、考え続けていくことが重要なのだと、改めて感じません。